故国の人のよそよそしさや
自分の事務や女のみだしなみが大切で
骨は骨　骨を愛する人もなし
骨は骨として　勲章をもらい
高く崇められ　ほまれは高し
なれど　骨はききたかった
絶大な愛情のひびきをききたかった
がらがらどんどんと事務と常識が流れ
故国は発展にいそがしかった
女は化粧にいそがしかった

ああ　戦死やあわれ
兵隊の死ぬるやあわれ
こらえきれないさびしさや
国のため
大君のため
死んでしまうや
その心や

【解説】　竹内浩三（たけうち・こうぞう）は1921年（大正10年）、三重県宇治山田市（現在の伊勢市）でも有数の呉服店の次男として生まれ、日大専門部（現在の芸術学部）に入学。マンガ、詩、シナリオ、小説を書き、映画監督をこころざしたが、1942年（昭和17年）入営、1945年4月、フィリピン・バギオの高地にて戦死。2年後、遺族のもとに届いた白木の箱には遺骨も遺品もなく、彼の名前が書かれた1枚の紙が入っていただけだった。

入営の2ヶ月前に書かれた「骨のうたう」の原作は戦争直後、浩三が出征前から参加していた同人誌『伊勢文学』第8号に初めて掲載された。その後友人によって補作されたものが1960年代に世に紹介され、次第に有名になっていった。1980年には、浩三の故郷伊勢市の朝熊山山頂に「骨のうたう」の一節を刻んだ詩碑が建てられた。「詩碑は戦没者の遺族に支払われた補償金とほぼ同額で建てられたという。もっと奮発して、図書館の敷地に記念碑を建てようという友人たちの声もあったそうだが、これだけは彼女（注・実姉松島こうさん）が譲らなかった。詩碑建設には『弟の命がこんなに安いのか』という、彼女の怒りが込められていたからだ。それに、あまり立派な墓を作らないでほしいというのは、生前における竹内浩三の希望でもあった。」（稲泉連「ぼくもいくさに征くのだけれど　竹内浩三の詩と死」中央公論社）

■参考　竹内浩三全作品集（藤原書店）、小林察編「戦死やあわれ」（岩波現代文庫）

無言館所蔵の表紙絵画の作者

石井芳雄　（いしい・よしお）

1913（大正2）年5月1日、東京・八王子の機屋の3人兄妹の長男として生まれる。府立織染学校（現八王子工業高校）卒業後、絵にめざめ、新宿の伊藤茂平研究所に通う。父亡き後、画家への道をあきらめて20代前半から家業を継ぐ。1943（昭和18）年9月、北支派遣衣三三一一部隊日野隊で野戦病院の衛生兵として出征。従軍中、妹や弟に数多くの絵葉書を送るが、1945（昭和20）年7月5日、北方へ移動中、結核で戦病死。享年32歳。

骨のうたう

戦死やあわれ
兵隊の死ぬるや　あわれ
遠い他国で　ひょんと死ぬるや
だまって　だれもいないところで
ひょんと死ぬるや
ふるさとの風や
こいびとの眼や
ひょんと消ゆるや
国のため
大君のため
死んでしまうや
その心や

白い箱にて　故国をながめる
音もなく　なんにもなく
帰っては　きましたけれど

竹内浩三